



日本学士院ニュースレター

2018. 10 No. 22



第108回授賞式で恩賜賞・日本学士院賞を授与される松村 剛教授
平成30年6月25日、第108回授賞式を挙行了しました。(関連記事2～5ページ)

目次

第108回日本学士院賞授賞式	2	斯波義信会員が唐奨受賞	9
会員寄稿(井村裕夫会員)	6	『学問の山なみ』から 一歴史をつくった会員― ..	10
学士院の歩み	7	第69回公開講演会のお知らせ	11
第68回公開講演会レポート	8	第11回学びのスメシリーズ講演会のお知らせ ..	11
アマルティア・K・セン客員を招へい	8	会員の逝去	12
日露関係史料をめぐる国際研究集会を開催	9	会員の近刊紹介	12
新幹事・第2部部長の選定	9	編集後記	12
柏原正樹会員がチャーン賞、京都賞受賞	9		

第 108 回日本学士院賞授賞式

天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、平成 30 年 6 月 25 日（月）に第 108 回授賞式を本院会館（東京・上野公園）で挙行了しました。本年は、恩賜賞・日本学士院賞 2 件 2 名、日本学士院賞 7 件 7 名、日本学士院エジンバラ公賞 1 件 1 名、計 10 件 10 名の方々に授賞を行いました。（所属は受賞当時）

恩賜賞・日本学士院賞

Dictionnaire du français médiéval（『中世フランス語辞典』）
松村 剛（東京大学大学院総合文化研究科教授）

「原子構造に基づくイオンポンプ作動機構の解明」
豊島 近（東京大学定量生命科学研究科教授）

日本学士院賞

『ドイツ史の始まり—中世ローマ帝国とドイツ人のエト
ノス生成—』
三佐川 亮宏（東海大学文学部教授）

「確率解析と数理ファイナンスの研究」
楠岡 成雄（東京大学名誉教授）

「キラル相間移動触媒の創製」
丸岡 啓二（京都大学大学院理学研究科教授）

「革新的ソフトマテリアルの精密階層設計に関する研究」
相田 卓三（理化学研究所創発物性科学研究センター
副センター長、東京大学大学院工学系研究科教授）

「アジア稲作に及ぼす地球温暖化の影響に関するシステ
ム農学的研究」
堀江 武（京都大学名誉教授）

「蛍光特性制御原理の解明およびバイオイメージングへ
の応用に関する研究」
長野 哲雄（東京大学名誉教授、昭和薬科大学常任監事、
東京大学創薬機構客員教授）

「インスリン分泌を制御するシグナル伝達の分子機構に
関する研究」
清野 進（神戸大学大学院医学研究科特命教授、神戸大
学名誉教授）

日本学士院エジンバラ公賞

「人類の起源と進化—ラミダス猿人から現生人類へ」
諏訪 元（東京大学総合研究博物館教授・館長）



式辞を述べる塩野 宏院長



院長から賞を授与される諏訪 元受賞者



祝辞を述べる林 芳正文部科学大臣



受賞者と林文部科学大臣、本院役員

＜受賞者寄稿＞

「中世フランス語辞典：幽霊語」

東京大学大学院総合文化研究科教授 松村 剛

2015年にパリで出版した拙著『中世フランス語辞典』(*Dictionnaire du français médiéval*)は、思いがけずアカデミー・フランセーズからフランス語圏大賞(2016年)を、日本学士院から恩賜賞・日本学士院賞(2018年)を授与される幸運に恵まれました。2段組3,500頁、56,212項目からなる拙著は、中世フランス語を現代フランス語で説明した1巻本の辞書です。日本語では1冊本『古語辞典』は多数流通していますから、1巻本『中世フランス語辞典』を作成してニュースになるのかと思う方も多いでしょう。実は、中世フランス語を中学高校で学習しないフランスでは、中世語(842年から15世紀までの北フランス語。ただし、イングランド、イタリア、十字軍時代のエルサレム周辺などで書かれた文献も含まれます)に関して、大部な辞書は存在するものの、1冊本で信頼できる辞典は存在せず、拙著はその欠落を埋めることを目指して作りました。

すでに存在する大部な辞書を機械的に処理すれば1巻本の辞典など短期間にできるはずだと想像する人は少なくないでしょう。しかし、その手法で英国で作られた中世フランス語の辞書は無残に間違いだらけでした。

既存の辞書はもちろん活用しましたが、用例は孫引

きしないことを私は原則としました。先人が引く単語が実は存在しない幽霊語である場合は意外に多くあるからです。たとえばギヨーム・ギヤール作『王朝系譜』(1307年頃)の近代版(1828年)には「彼のarreraisが逃れるのを見た時」といった意味の1行があります。このarreraisはトブラーとローマッチの11巻本『中世フランス語辞典』(1925-2008年)に載っていますが、意味は不明でした。前例に倣いこの単語を拙著に収録すべきでしょうか。近代版が間違っているかもしれないと思った私は、『王朝系譜』の現存唯一の写本(フランス国立図書館蔵)で該当箇所を確認してみました。するとそこにはanemisと書かれていたのです。これは「敵」を意味する現代フランス語の名詞ennemiの古い綴りにすぎず、この単語自体14世紀初頭には珍しくありません。したがって幽霊語arreraisは拙著には収めませんでした。

その逆に、従来知られていなかった単語や表現を多様なジャンルの資料から引いた場合もありますし、ある地域に限定された単語ないし意味に関してそれと明記したのは最近の語彙研究の成果の反映です。もちろん1巻本ですからおのずと収録語数、用例数には限りがありますが、中世フランス語に関心を持つ読者に少しでも役立てば幸いです。



両陛下に研究内容をご説明する松村受賞者



授賞式後、樋口陽一第1部部長と懇談する松村受賞者

<受賞者寄稿>

「蛋白質を理解すること」

東京大学定量生命科学研究所教授 豊島 近

1989 年以来、ほぼ 30 年に亘ってカルシウムポンプとナトリウムポンプとほぼたった 2 つの蛋白質だけを対象に構造生物学研究を行ってきました。それは、イオンポンプ蛋白質というものが理想的に面白いからです。イオンポンプ蛋白質は ATP（アデノシン三リン酸）の加水分解によって放出されるエネルギーを利用し、特定のイオンをその濃度勾配に逆らって、生体膜（脂質二重膜）を越えて能動的に輸送する膜蛋白質（生体膜に埋まっている蛋白質）です。カルシウムポンプであれば、周りにはカリウムイオンが 100 万倍、ナトリウムイオンが 10 万倍ほどある中からカルシウムイオンのみを選別し、1 万倍の濃度勾配に逆らって 1 秒間に 100 回ほど輸送できます。他の ATP を分解する蛋白質（酵素）と異なり「ATP の γ 磷酸（3 つある磷酸のうち末端にあるもの）をまず蛋白質のアスパラギン酸残基に転移し（自己磷酸化）、それをさらに無機磷酸に加水分解し放出する」というのが、この酵素が行う化学反応です。濃度勾配に逆らった輸送をするために、蛋白質には二つゲートが備わっており、一方を閉めてから他方を開けるという運動を化学反応と同期して行います。そのメカニズムを解明したいのです。蛋白質は立体構造を変化させてその機能を果たすのですから、その原子構造をイオン輸送サイクルのすべ

ての中間状態で決定するのが出発点のはずです。当初は膜貫通ヘリックス（脂質二重膜を貫くらせん構造）すら解像できませんでした。カルシウムポンプに関しては、X 線結晶解析によって、イオン輸送サイクルほぼ全体をカバーする 11 の中間体の原子構造の決定に成功し、今や量子化学計算によって水素やプロトンの位置、役割をも議論することができるようになりました。一方で、ポンプ蛋白質は脂質二重膜までもそのメカニズムに組み込んでいることも分かってきました。技術開発をしながらの構造研究であり、遅い歩みでしたが、今回の受賞はその努力を認めていただいたのだと思います。

二つの蛋白質の構造研究を通じて理解したことは、自分の前には想像もできない長大な時間が存在するという事です。蛋白質はあまりにも良くできています。研究の過程で自分の理解は全く不十分であったと何度も思い知らされました。「蛋白質の構造はどうしてそうでなければならないのか」を明らかにするのが自分の科学者としての使命だと感じています。それには構造を見て考える長い時間の積み重ねが必要です。何年も考え続けている問題もあります。許される限り蛋白質の理解を深め、次の世代に引き継ぎたいと願っております。



豊島受賞者と研究資料展示



会員らと懇談する豊島受賞者

＜受賞者寄稿＞

「化石による人類進化の研究を考える」

東京大学総合研究博物館教授・館長 諏訪 元

化石の記録から人類の進化史を考える営みはダーウィンの進化論と共に始まった。そして先ずはネアンデルタールとホモ・エレクトスが19世紀中に、次にアウストラロピテクスが1924年に発見された。1960年代になると、化石層準の周辺の地層について放射性元素等による年代測定法が適用され始め、比較的正確な時間軸のもとに系統と形態進化の諸仮説が構築されるようになった。また、古環境等のコンテキスト情報の解析が様々に考案され、より多面的な進化仮説を可能にしてきた。ラミダスなど、アウストラロピテクスより前の人類については、その存在が1992年に初めて明らかになり、2000年代に入ると500万から700万年前の人類化石が相ついで報告された。

一方、各時代と地域の化石資料は依然としてはなほだ貧弱であり、また、ネアンデルタールの系統など近年得られているゲノム情報でさえ(最古の例は30万年前まで遡る)、進化的解釈は複数通りあり得るのが常である。そのため、統一的な見解にはなかなか至らない。そうした中、何がゆるぎない一次データとそれと直結する進化仮説なのか、また提唱されている仮説が多面的な証拠とどれだけ包括的に整合的か、十分に検討する必要がある。それには形態の比較解析といった一見単純な一次研究でさえ、あるいはそれこそ、慎重に行う必要がある。いずれの化石についても、同類や周辺の化石がさらに発見され、仮説と解釈の整合性は追試される。

近年の人類化石研究は、成果主義と評価主義の波におされてか、特に新発見の化石の場合、その意義の拡大解釈に偏る傾向がある。何某の新化石が既存知識を大幅に塗り替える、といった報道を良く見聞きすることがある。しかし、実際にそうした化石はほとんどなく、むしろ既存仮説を一部支持しながら部分的に改定するものである。ラミダスの発見と研究のように、それまでの知識の空白を大きく埋める成果でさえ、既存知見を根本的に塗り替えるものではなかった。

最近、ある化石について意見の異なる海外の研究者と共著論文を作成した。幸い、趣旨通りに受理されたが、その審査過程には驚いてしまった。査読者と編集担当者(共に欧米の者と思われる)が、共著者の意見が統一されていないことを問題視したばかりでなく、複数の可能性が提示されるのは残念で、結果の「ドラマチック」さが減少している、といった批評が述べられた。これには愕然とした。表面的な結果主義へここまで偏向しつつあるならば、それは大きな危機である。

自分自身で目指してきたのは、数十年単位で有用であり続ける論文成果である。少ない一次情報から成り立つ人類化石の研究では、一次情報の正しい蓄積と、それらに基づいた有意義な生物学的解釈を提唱することが重要であり、今後もその取り組みに励んで行きたい。



諏訪受賞者と研究資料展示



来賓と懇談する諏訪受賞者夫妻

(会員寄稿)

医学と情報

井村 裕夫 会員 (内科学専攻)

21 世紀の医学の最も大きな特徴は、人体を構成する基本情報とも言うべきゲノムの研究の発展である。2003 年、長い期間と膨大な費用を投入した国際プロジェクトが終了し、標準的なヒトゲノムが明らかになった。その後次世代シーケンサー（NGS）と呼ばれる機器が開発され、短時間で、しかも廉価で個人のゲノムを解読することが可能となった。ゲノム情報が研究室から病院へ入ってくる時代となったのである。

ゲノムは A、G、C、T という 4 種の塩基がおよそ 30 億並んだ暗号文のようなものである。従って NGS を用いてゲノムを解析しても、それだけで役に立つ情報が得られない。そこで生命情報科学（バイオインフォマティクス）の専門家による解析が必要となる。残念ながら日本にはこの分野の専門家が少ないことが、大きな問題となっている。

従来の医学は、標準的な患者を対象としたものであったと言える。多数の人を対象とした観察から得られた証拠に基づいて診断と治療を行う「証拠に基づく医療（EBM）」が重視されてきた。しかし人には多様性があるので、より個人の特徴に基づいた医療、「個の医療」が必要であることは言うまでもない。特に個人のゲノム情報が得られるようになると、それに基づいた個の医療が、新しい医療として注目されるようになった。それが精密医療（プレジジョン・メディシン）である。その中でもがんゲノムの解析情報に基づいて薬剤を選択する医療、標的治療がかなり多くのがん治療に適用されるようになった。がんの精密医療はすでに日常臨床に導入されつつあると言えよう。

しかし精密医療はがんにとどまるものでなく、すべての疾患に適用されるべきものである。さしあたってメンデル型遺伝をする単一遺伝子病が対象となっており、ゲノムの変異の解析が進んでいる。これからの課題は、それらの情報をもとにした治療法の開発である。さらにゲ

昭和 6 年、滋賀県生まれ。

京都大学医学部医学科卒業。神戸大学医学部教授、京都大学医学部教授・医学部長、京都大学総長、総合科学技術会議議長、財団法人先端医療振興財団理事長等を歴任。フランス国家功労賞、瑞宝大綬章、名誉大英勳章 CBE 受賞・受章。平成 6 年より日本学士院会員。現在、日本学士院幹事。



ノム変異そのものを矯正する遺伝子治療の研究も進みつつある。

精密医療の最終の目標は、糖尿病、高血圧、心筋梗塞、脳血管疾患などの、いわゆるコモン・ディジーズである。これらの疾患にも遺伝素因が関与していることは、従来の臨床的な観察から明らかである。そこでヒトゲノムの解読が進むと、まず全ゲノム関連解析（GWAS）という方法が導入された。ヒトゲノムには非常に多くの一塩基多型（SNP）が存在する。例えば標準ゲノムで A のところが G に置換されたものである。コモン・ディジーズはありふれた遺伝子多型に由来するとの発想から、比較的多い SNP を指標として、疾患群と対照群を比較してその頻度に有意差があれば、その近くに疾患感受性遺伝子が存在するという考え方に基づいて、GWAS が導入された。そして多くの疾患について研究が行われ、それぞれに多数の関連 SNP が見出された。しかし個々の SNP の影響力は小さく、まだ遺伝率の一部しか説明できない。その理由は明らかでなく、種々の研究が進められている。その中で一つ注目されているのが早期の環境の影響である。

コモン・ディジーズの多くは中年以降に発症する。しかし胎生期、あるいは生後早期の栄養やストレスなどの環境が、後年の病気の発症に関連することが多くの疫学的研究から明らかになってきた。そうすると早期の個人の医療情報が、後年の疾患の予防、治療に必要であることになる。こうした個人の健康情報をどのように保管し、活用していくか、プライバシーが関係するだけに難しい問題である。しかし高齢者の病気を予防し、健康な長寿を達成することは、長寿時代となった現在の世界にとって喫緊の課題であり、こうした情報の活用が不可欠となる。情報の適切な保管と活用は、これからの医療にとって大変重要な課題であり、専門家の育成が求められている。

学士院の歩み 第14回 帝国学士院会館の落成

日本学士院は、明治6（1873）年に結成された近代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12（1879）年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39（1906）年に帝国学士院に改組し、昭和31（1956）年に現在の日本学士院となりました。このコーナーでは、130年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介します。

明治12（1879）年に東京学士会院が創設された頃には専有の会館がなく、文部省内の修文館、御茶ノ水の昌平館、上野公園の教育博物館（現在の国立科学博物館）を転々としていた。明治19（1886）年、上野公園の東京美術学校内（現在の東京藝術大学美術学部）に新会館が建てられた。明治39（1906）年に帝国学士院に改組されてからも引き続き使用されたが、改組による定員増もあり手狭で機能拡張に対応できるものではなかった。

そこで、会館の新築が院内の議にのぼり、文部省にも交渉したものの容易に実現をみなかった。そこに、たまたま篤志家から新建築物寄附の申し出があり、受諾することとなった。敷地について文部省と交渉の結果、大正10（1921）年に至り、帝室博物館（現東京国立博物館）の所管にかかる上野公園内両大師前四軒寺跡の一千坪を敷地とすることが確定した。しかし、前述の篤志家の寄附は、申込み当時から数年を経過し、経済の変動の影響も受け、申し出を辞退せざるを得なくなった。

新会館の建築は急を要する情勢であったので、この敷地決定を機会として改めて予算交渉を行い、大正11

（1922）年11月、建築費が3カ年の継続事業として予算30万円で通過した旨の報告が行われた。

会館は当初、文部省建築課において設計され、院内の建築委員会で審議の上、大正13（1924）年12月に起工された。その後、大正14（1925）年4月に大蔵省営繕管財局に移管され、多少の設計変更が行われた後、大正15（1926）年9月に竣工した。

会館は鉄筋コンクリート造で、主要部分は3階建、建坪延面積665坪であった。正面中央や大会議室に代表されるように半円形のデザインが特徴的で、菊池重郎氏によると、ゼッエッション様式（分離派。古い体制を否定する芸術運動）の日本的受容であるという。

1階玄関を入ると正面にある階段を昇ると、2階の広間に出て、会員控室や委員会室、大会議室の入口があった。大会議室は3階まで吹抜になっていて、英国議会のように、議長席を挟むように向かい合わせに座席が配置されていた。現在の総会議場が大陸型のように半円形になっているのとは対照的である。

同会館は、帝国学士院が昭和22（1947）年に日本学士院に改称された後も使用され、昭和49（1974）年に、同じ場所に現会館が建てられるまで、毎月の例会や授賞式の開催など、本院の活動を支えた。

写真

上段

（左）外観

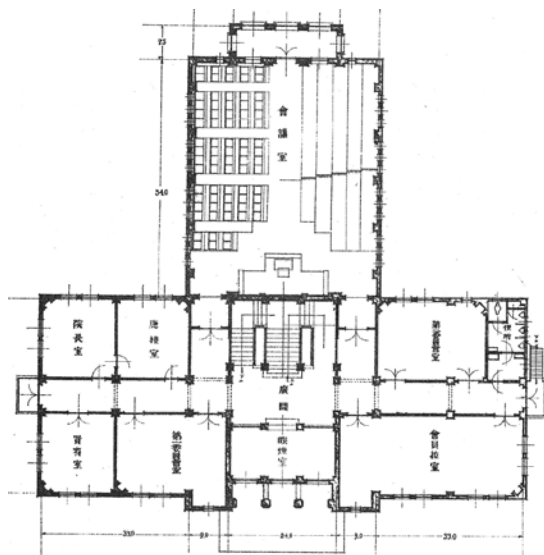
（右）2階平面図

下段

（左）1階広間

（中）大会議室

（右）会員控室（推定）



第 68 回公開講演会レポート

平成 30 年 5 月 19 日(土)に筑波大学との共催により、第 68 回公開講演会をつくば市の筑波大学春日講堂において開催しました。西尾 勝会員(東京大学名誉教授)が「地方分権改革を目指す二つの路線」、深谷賢治会員(米国ニューヨーク州立大学ストーニー・ブルック校サイモンズ幾何物理センター教授)が「空間と図形の論理と現実」と題して講演を行いました。

西尾会員は日本における地方分権改革について、平成 7 (1995) 年以来今日まで続く日本の「地方分権改革」では、国と都道府県と市区町村の間の行政サービス提供業務の分担関係は変更せずに、都道府県や市区町村の提供業務の執行に対して国や都道府県から加えられてきた

関与を減らしたり弱めたりする自由度拡充路線の方が主流になっていることを解説しました。また、深谷会員は空間や図形の理解のために用いられてきた幾何学の発展について、現代数学の幾何学では、科学技術の発展により、直接体験したりみたりする世界を超えた、極微だったり、巨大だったりする、現実についての知見が重要な役割を果たすようになったことを、図絵や写真を示しつつ具体的に説明しました。

講演終了後は活発な質疑応答がなされ、聴講者からは「地方分権改革の歴史が良くわかった」「想定していなかった視点で面白かった」「数学に関するお話をもっと聞いてみたいと感じた」等の感想が寄せられました。



講演を行う西尾 勝会員



講演を行う深谷賢治会員

アマルティア・K・セン客員を招へい

平成 30 年 4 月 22 日から 26 日までアマルティア・K・セン客員(ハーヴァード大学経済学部・哲学部教授、トーマス・W・ラモント特任教授)を招へいし、4 月 25 日(水)に来日記念講演会を行いました。

セン客員は、「Democracy and Elections」(民主主義と選挙制度)と題して、民主主義の経済学と政治哲学に関する原理的な考察に加え、米国やインドなどにおける多数決ルールと称される政治的な決定手続きの評価について講演を行いました。

セン客員は、厚生経済学および正義論を中心とする倫理学・政治哲学において独創的な業績を挙げ、1998 年にノーベル経済学賞を受賞した第一級の経済学者・哲学者です。セン客員は、厚生経済学の射程を大きく延長して、所得と富の分配の衡平性や、個人的権利と社会的福祉の整合性など、規範的な経済学のフロンティアの開拓に貢献するとともに、貧困・飢饉・飢餓など焦眉の社会

問題の解決にも関与して、純粋理論と公共政策の連結環を発見する作業に積極的に取組んできました。その研究は、日本の経済学・政治哲学の研究にも多大な影響を及ぼしています。



講演を行うアマルティア・K・セン客員

日露関係史料をめぐる国際研究集会を開催

平成30年5月21・28日(月)の両日、国際学士院連合関係プロジェクト「未刊行日本関係史料調査事業」の一環として、東京大学史料編纂所(保谷徹所長)と共催による「日露関係史料をめぐる国際研究集会1・2」を2週連続で開催しました。東京大学史料編纂所では、日本学士院の委嘱を受けたプロジェクトとして、ロシアに所在する日本関係史料の系統的な調査・研究と収集にも取り組み、現地の研究機関と協力して国際研究集会や共同研究を継続しています。今回は2週連続となり、ロシアから4名の研究者を招へいしてロシアの文書館が所蔵する史料群に基づいた報告などが行われました。

5月21日の研究集会では、3本の報告が行われ、参加者は、専門研究者ら約50名でした。第1報告では、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所ワジム・クリモフ上級研究員から、「日露関係のなかで成立しなかったことの歴史から—レザノフ使節がもたらした日本人が受取らなかったロシアの贈り物—」と題し、1804年に来航したロシア使節レザノフが、將軍宛に持参した贈り物、とくに「象のからくり時計」を中心に報告がありました。第2報告はロシア国立海軍文書館ワレンチン・スミルノフ館長による『「日本の諸港に来るロシアの軍艦は皆この国が友好国だと感じる…」(明治期の日露関係エピソードの数々)」でした。1861年、ポサドニク号事件後のロシア太平洋艦隊分艦隊の動向を、日本を訪れた艦隊司令官との関係で描いたもの。ロシア国立海軍文書館が所蔵する太平洋艦隊のフォンドから、関係史料が丹念に紹介されました。第3報告は、ロシア国立歴史文書館セルゲイ・チェルニャフスキー館長による「天皇睦仁に関する情報(ロシア国立歴史文書館所蔵文書より)」でした。同館が所蔵する財務省史料のフォンドに、外務省から写して回された、明治天皇の死亡情報を伝える駐日外交官の報告書などが含まれていました。

5月28日に開催された研究会にも、専門研究者約50名が参加しました。当日は、研究代表者の保谷所長が「在外日本関係史料の調査事業とロシアにおける日本コレクション」と題し、史料編纂所における海外史料調査の歴史について報告しました。とくに、サハリンアイヌとの交易帳簿(東洋古籍文献研究所)を筆頭に、武器・武具や日用品(国立人類学民族学博物館)、大砲(国立軍事博物館)、縄張り図などの図面類(国立海軍文書館)、そして松前藩の史料などの古典籍類(国立サンクトペテルブルク図書館)、ロシア調査で次々と「発見」された日

露間の北方紛争招来品について紹介し、こうしたコレクション形成史がようやく完結することへの期待を述べました。次に、東洋古籍文献研究所ワシーリー・シェプキン上級研究員から、「長崎に限らない—近世日本古典籍がロシアに渡った経緯について—」と題した報告がおこなわれました。報告では、大黒屋光太夫やシュトゥツェルのコレクションを皮切りに、古籍文献研究所が所蔵する古典籍コレクションについて、ロシア側に残る史料や目録を紹介しつつその形成過程を詳細に論じました。(本記事は保谷所長の報告を元に作成しました。)

新幹事・第2部部長の選定

平成30年5月14日に幹事選挙を行い、井村裕夫会員(内科学)が選定されました(写真左)。また、6月12日に第2部部長選挙を行い、野依良治会員(有機化学)が選定されました(写真右)。



柏原正樹会員がチャーン賞、京都賞受賞

平成30年8月1日、第4分科の柏原正樹会員(数学)が、国際数学連合よりチャーン賞を受賞することが発表されました。受賞理由は、「50年以上にわたる代数解析及び表現論に対する顕著で基礎的な貢献」です。

また、稲森財団より京都賞(基礎科学部門)を受賞することが発表されました。受賞理由は、「現代数学諸分野への多大な貢献：D加群の理論の基礎からの展開」です。なお、授賞式は平成30年11月10日に行われます。

斯波義信会員が唐獎受賞

平成30年6月20日、第1分科の斯波義信会員(中国史)が、台湾の唐獎財団より唐獎(Tang Prize)第三回漢学獎(中国学部門)を9月に受賞することが発表されました。受賞理由は、「中国・日本・西洋の学問の特長を融合する独特な理論的レンズを通して達成された中国社会経済史への精通と深い識見」です。

『学問の山なみ』から—歴史をつくった会員—

130年を超える学士院の歴史の中で、500名以上の会員が選ばれました。このコーナーでは、物故会員追悼の辞を集めた『学問の山なみ』から毎回2名を紹介します。

高楠 順次郎 たかくす じゅんじろう

慶応2(1866)年—昭和20(1945)年

明治45(1912)年帝国学士院会員選定



広島県の生まれ。三原の櫻南舎に入り漢学を修めた。20歳の時に京都に出て、西本願寺の普通教校に入り4年で卒業した。在学中、禁酒運動のために反省会を設立し、反省会雑誌(中央公論の前身)を発行して文筆を振るった。卒業の前年、高楠家の養子となり、以後高楠順次郎と名乗った。

明治23(1890)年、オックスフォード大学に留学し、マックス・ミュラーのもとで梵語を修め、ジャイルズを師とし友とした。滞在中『東方聖書』に観経の英訳を出し、その後キール、ベルリン、ライプチヒで勉強してドクトルとなり、オックスフォードに戻った後マスターの学位を得た。明治30(1897)年に帰国した後、帝国大学文科大学(現在の東京大学文学部)講師・教授として梵語学講座(一時言語学講座)を担当し、印度哲学科

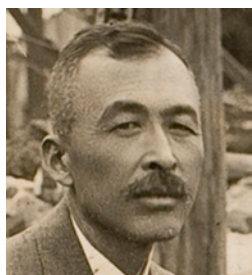
の世話役を務めた。明治33(1900)年末から明治41(1908)年まで東京外国語学校(現在の東京外国語大学)長を兼任し、大正13(1924)年には武蔵野女子学院を創設して昭和18(1943)年まで校長を務めた。昭和6(1931)年から昭和9(1934)年まで東洋大学長を兼ね、晩年は中山文化研究所長を務めた。海外出張等も多く、ブリュッセルで開催された国際学士院連合総会に本院から出席し、またハワイ大学では講義を行った。

学問上の活動もかなり多方面であったが、一貫して変わらなかったのは、仏教の研究、特に梵文とパーリ文に依る研究であり、大正大蔵經の編纂と南伝大蔵經は特筆すべきものである。その和訳監修は、梵文やパーリ文を参照するものではじめてなしうるもので、その規模は空前であった。この大事業は、東西(または南北)に分かれていた仏教仏典の連鎖を究明することが出発点であり、また根幹をなしていた。前述の観経の英訳は、浄土三部經の中梵本の現存しない一經を漢訳から訳して欠を充たしたものであり、これに続いて義浄南海寄歸伝の英訳と研究や後年長井眞琴と共編で出版したパーリ文 Samanta-pāsādikā につながる研究も行った。その後、日本国内に梵学の跡を訪ね、また仏典古典の異本や未見文を求めることにも力を尽くした。

姊崎 正治 あねさき まさはる

明治6(1873)年—昭和24(1949)年

大正12(1923)年帝国学士院会員選定



京都府の生まれ。明治26(1893)年帝国大学文科大学(現在の東京大学文学部)に入学後、哲学、宗教、文芸思想等の各方面にわたって幾多の論説を各種の雑誌に掲載した。卒業後、大学院に入り、明治31(1898)年に講師として宗教学の新講義

を担当した。この時期の著作として『印度宗教史』、『比較宗教学』、『宗教学概論』等がある。明治33(1900)年、宗教学研究のため、満3年ドイツ及び英国に留学を命ぜられた。帰途インドで仏蹟を見学し、帰国後教授に任ぜられた。その間、「現身仏と法身仏」と題する論文で文学博士の学位を授与された。明治38(1905)年、東京帝国大学に宗教学講座が創設されると講座担任を命ぜられた。また、大正12(1923)年、関東大震災で東京帝国大学附属図書館が全焼すると、図書館長に補せられ、

その復興に尽力した。

研究は多方面にわたり、『根本仏教』、『日本宗教史』、『聖徳太子の大土思想』、『法華經の行者日蓮』、『切支丹の研究』、『新時代の宗教』、『世界文明の新紀元』等多数の著書がある。欧文における著書論文も30余編に及んでいる。大正2(1913)年にはハーヴァード大学で2年間日本文明講座を担当し、その間シカゴ大学で日本仏教、エール大学で日本美術等について数回の講義をなした。その後もパリのコレージュ・ド・フランスやストラスブルグ大学、カリフォルニア大学等でも講義を行った。昭和4(1929)年以降、国際連盟の知的協力国際委員会委員に推挙され、世界平和のために努力した。

帝国学士院では、大正15(1926)年から昭和10(1935)年まで幹事を務め、院長を補佐した。また学士院紀事及び別冊出版委員の委員長として尽力し、昭和17(1942)年の邦文紀要創刊後は編集主任を務めた。さらに、昭和14(1939)年には貴族院帝国学士院会員議員に当選した。国立国会図書館の設置に当たって、昭和21(1946)年6月、有志とともに国会図書館懇談会建議書を貴衆両院に提出し、さらに同年10月には貴族院に「議會図書館の設立と国立図書館の拡張に関する決議案」を提出し、満場一致を以て可決された。

第 69 回公開講演会のお知らせ

第 69 回公開講演会を日本学士院において開催します。
下記まで事前にお申込みください。(定員 150 名)

《講 演》

佐藤 彰一会員 (名古屋大学名誉教授)

「歴史の語りと意味—『モン・サン・ミシエルのアリストテレス』論争とその後—」

堀川 清司会員 (東京大学名誉教授、埼玉大学名誉教授、武蔵工業大学名誉教授)

「『海岸工学』—私の終生の研究課題—」

《日 時》

平成 30 年 10 月 27 日 (土) 午後 2 時～5 時 10 分

《会 場》

日本学士院 (東京都台東区上野公園 7-32)

《申込方法》

日本学士院ホームページの専用フォームから、または



佐藤 彰一会員



堀川 清司会員

メール (gkkouen@mext.go.jp)、FAX (03-3822-2105)、
往復はがきのいずれかの方法で必要事項を記入の上、お
申込みください。

《必要事項》

メール・FAX の場合、「公開講演会聴講希望」と明記
の上、氏名 (ふりがな)、住所、電話番号等連絡先を記載。

第 11 回学びのススメシリーズ講演会のお知らせ

本講演会は、様々な分野で素晴らしい研究を重ねてき
た日本学士院会員が、日本の将来の担い手となる子ども
たちに知ることのおもしろさ、学ぶことの楽しさを知っ
てもらう一助になればという思いから企画されました。

《日 時》

平成 30 年 12 月 8 日 (土) 午後 2 時 30 分～
(質疑を含めて 1 時間程度を予定)

《会 場》

日本学士院 (東京都台東区上野公園 7-32)

《対 象》

中学生・高校生・一般 (定員 150 名)

《申込方法》

日本学士院ホームページの専用フォームから、または
メール (gkkouen2@mext.go.jp)、FAX (03-3822-2105)、
往復はがきのいずれかの方法で必要事項を記入の上、お
申込みください。

《必要事項》

メール・FAX の場合、「学びのススメ聴講希望」と明
記の上、氏名 (ふりがな)、住所、電話番号、メールアドレス、
中学生/高校生/一般の別を記載。

「機械翻訳の話」

長尾 真会員

(京都大学名誉教授、元国立国会
図書館長)



コンピュータを使った言語
の翻訳 (機械翻訳) の研究は 1950 年代から始まりまし
た。欧米の言語は文の構造が似ているので機械翻訳は比
較的らくですが、日本語と英語の間の翻訳などでは、文
の構造が違ふし文化も違うので非常に難しいのです。し
かし 50 年以上の努力によって今日ではかなり良い質の
翻訳ができるようになってきました。音声認識の研究
も進み、書かれた文章の翻訳だけでなく、しゃべった言
葉も翻訳ができるようになってきています。2020 年の
東京オリンピック・パラリンピックではスマートフォン
などで世界の主要言語の翻訳が実用されようとしていま
す。この講演では、国立研究開発法人情報通信研究機構
の研究者にスマートフォンでの機械翻訳の実演を皆さん
とともにしてもらい、その実用性を体験していただく予
定です。

会員の逝去

次の方々が逝去されました。

荒田 吉明 会員 平成30年6月5日 享年94歳
(第5分科・高温工学・溶接工学専攻)

石坂 公成 会員 平成30年7月6日 享年92歳
(第7分科・免疫学専攻)

会員の近刊紹介

- ・久保 正彰『西洋古典学入門 叙事詩から演劇詩へ (ちくま学芸文庫)』筑摩書房、平成30年8月
- ・青柳 正規『人類文明の黎明と暮れ方 (講談社学術文庫 興亡の世界史)』講談社、平成30年8月
- ・フロスト (著)・川本 皓嗣 (編)『対訳 フロスト詩集 アメリカ詩人選4 (岩波文庫)』岩波書店、平成30年8月
- ・荻阪 直行『社会脳ネットワーク入門 社会脳と認知脳 ネットワークの協調と競合』新曜社、平成30年4月
- ・三谷 太一郎『近代と現代の間 三谷太一郎対談集』東京大学出版会、平成30年7月
- ・奥田 昌道・安永 正昭 (編)『法学講義民法総則 第3版』勁草書房、平成30年5月
- ・佐々木 毅 (編著)『民主政とポピュリズム ヨーロッパ・アメリカ・日本の比較政治学 (筑摩選書)』筑摩書房、平成30年6月
- ・村松 岐夫 (編著)『公務員人事改革 最新 米・英・独・仏の動向を踏まえて』学陽書房、平成30年7月
- ・石井 寛治『明治維新史 自力工業化の奇跡 (講談社学術文庫)』講談社、平成30年4月
- ・鈴木 興太郎『厚生経済学と経済政策論の対話 福祉と権利、競争と規制、制度の設計と選択』東京大学出版会、平成30年5月
- ・竹内 啓『歴史と統計学 人・時代・思想』日本経済新聞出版社、平成30年7月
- ・野中 郁次郎 (編著)『野中郁次郎ナレッジ・フォーラム講義録』東洋経済新報社、平成30年8月
- ・広中 平祐『学問の発見 数学者が語る「考えること・学ぶこと」(ブルーバックス)』講談社、平成30年7月
- ・白川 英樹『知ること セレンディピティーと待ち構えた知性とは 中災防ブックレット2』中央労働災害防止協会、平成30年5月
- ・岸本 忠三 (述)・大阪大学アーカイブズ (編)『岸本忠三 第14代大阪大学総長回顧録』大阪大学出版会、平成30年7月
- ・山中 伸弥『走り続ける力』毎日新聞出版、平成30年7月

編集後記

第22号ニュースレターでは、日本学士院第108回授賞式の報告及び受賞者からの寄稿、会員からの寄稿のほか、公開講演会レポート、客員講演会レポートなどを掲載しております。ご寄稿いただきました先生方には心より御礼申し上げます。

今年の第108回授賞式は、恩賜賞並びに日本学士院賞受賞者2名、日本学士院賞受賞者7名及び日本学士院エジンバラ公賞受賞者1名に対し、今上天皇最後の行幸啓を仰ぎ、挙行されました。当日は、梅雨時期とは思えない素晴らしい天気恵まれ、院長を始めスタッフや関係各位のご準備・ご協力のお陰で授賞式を滞りなく終えることができましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、今年も関東は、桜とともに春がやって来ましたが、それ以降は、少し季節が早く進んでいるように感じました。毎年楽しみにしている春薔薇が昨年より2週間くらい早く咲いていて危うく見損ねる所でした。また、6月下旬には観測史上最も早い梅雨明けとなり、7月に入ると連日猛暑日の夏真っ盛りで、初夏を感じることなく夏本番となりました。年々暑さが増してきているように思いますが、2年後に開催されます東京オリンピック・パラリンピックも暑さ対策が鍵となるのではないのでしょうか。そのような状況でも、上野公園一帯は、上野動物園の人気者のシャンシャンが整理券なしで見ることが出来るようになったこともあり、連日多くの人たちで賑わっています。秋には「2018秋 上野の山文化ゾーンフェスティバル」が開催されますので、足を運んでみては如何でしょうか。

最後に、日本学士院では毎年、一般の方々を対象とした「公開講演会」と中学生・高校生を主な対象とした「学びのススメ講演会」を開催しております (P.11)。皆様のご参加をお待ちしております。 (H)

◎お問合せ先

日本学士院

〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-32

電話: (03)3822-2101

FAX: (03)3822-2105

E-mail: gkjim@mxet.go.jp

第22号: 発行日: 平成30年10月10日

(年2回 4月、10月発行)

ホームページもご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>